九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 現象学的還元と夢解釈

荒木, 正見
福岡女学院大学 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/1683787

出版情報：福岡女学院大学紀要. 人文学部編. 10, pp.1-24, 2000-02. 福岡女学院大学
バージョン：
権利関係：

# 現象学的還元と夢解釈

荒　木　正　見

「福岡女学院大学紀要」第10号抜刷
Fukuoka Jogakuin University Bulletin
2000年２月

# 現象学的還元と夢解釈

荒　木　正　見

## 序．夢の解釈

小論は，哲学と心理学との接点から，比較論的に夢を解釈する方法を探究する試みの一端である。特に小論では，フッサールの現象学的還元を基底として展開する夢解釈の方法について述べる。

論文の軸については以下のように設定する。

一貫して，夢解釈の概略を述べるが，この「夢解釈」という語については，鑪幹八郎『夢分析入門』（創元社，1976/1996）で，「夢分析」と比較して，次のように述べられている。

まず，夢分析については，「『夢の分析』とは，夢の（顕在）内容をイメージ，要素，事物，文章といったものの集積と考え，客観的な水準においてとり扱おうとするものである。従って，この水準では，誰の目にもはっきりと具体的に，析出された資料を確かめることが可能である。」（275頁）とされる。

他方，夢解釈については，「夢の意味づけ」とされ「『夢の分析』からの資料を統合し，分析者や夢主が夢のもつ意味を引き出す過程を指している。」（275頁）と，される。

そしてこの両者の比較において最大の違いは，前者が客観的な水準で取り扱われるのに対して，後者は主観的な水準ともいえる点にある。すなわち「いろいろの意味づけを可能にする。唯一の客観的，普遍妥当的な解釈は存在し

ない。」(275頁)とさえ述べられている。しかし，それでは夢の意味の具体的妥当性はないのか，ということになるが，結局は，夢という象徴性の高い対象を象徴的な言葉で意味づける以上，数学のような妥当性はあり得ない。また，妥当性については，それぞれの夢解釈者が自らの解釈の方法を開陳することで，それぞれの方法を追体験することによって確認することができる。この点は，すべての科学的方法と一致する。小論は，そのような意味での，現象学的還元に端を発した夢解釈の方法を考察するものである。

ところで，このように，夢解釈，もしくは夢分析の方法は多岐にわたり，それらを比較検討するのは小論の範囲を越えるので，ここでは，それらを比較検討した結果，筆者が現実的な教育相談の場で用いている夢解釈の方法を述べつつ，その論拠を検討する。

なお，このような方法論についての論証は，具体例の検証によって論理性を高めなければならないが，小論の紙幅では不十分である。当面小論では，その点を割愛しつつ，夢解釈の一端を考察するにとどめる。

## 1．現象学的還元

現れた夢の内部の構造を考察する以前に，夢もしくは存在すべての認識に伴う構造的問題を考察しなければならない。後述するように，これは夢をはじめとする象徴的要因の強い事柄の解釈には特に重要なことだといえる。

存在すべては，われわれがそう思っている通りに存在しているのだろうか，というのがその構造的問題の契機である。フッサールは，その問題を「現象学的還元 (die Phänomenologische Reduktion)」という概念とともに次のように提起した。

フッサールが現象学的還元の概念を確立したのは，EDUMUND HUSSERL "DIE IDEE DER PHÄNOMENOLOGIE-FÜNF VORLESUNGEN -" (Herausgegeben und Eingeleitet von Walter Biemel, Martinus Nijhoff, 1973) のヴァルター・ビーメルによる編者序文 (Einleitung des Herausger-

bers)では，この書のもとになる講述をゲッティンゲンで行った1907年だとされている(S.7)。従って，ここでは，この書を参考にしつつ現象学的還元の意味を考察する。

フッサールはまず，「哲学的思考（philosophisches Denken)」と，「生活や学問における自然的思考（natürliches Denken)」とを区別する（S.3)。

前者は「認識可能性の諸問題に携わる立場」であり，後者は「認識可能性の諸々の難問には無頓着な思考」である(S.3)。そして，フッサールにおける認識可能性の問題，すなわち認識論とは，デカルトの懐疑考察（die Cartesianische Zweifelsbetrachtung）に始まるとされ，それに関して次のように述べられている。

「コギタチオ（cogitatio)，すなわち，体験しそれについて端的に反省している体験の存在は疑い得ず，コギタチオの直観的，直接的な把捉と所有はすでにひとつの認識することであり，コギタチオネス(cogitationes)は最初の絶対的な所与性である。」(S.4)

すなわち，コギタチオ，およびコギタチオネスとは，E．フッサール・立松弘孝訳『現象学の理念』（みすず書房，昭和40年／昭和44年)の訳注に，「純粋思念」「顕在的な意味体験」と述べられているように（151頁)，構造的には意識現象であり，「体験に対する端的な反省」「直観的，直接的所与」などと述べられるように，複雑な反省や思弁的な反省を加えない，意識に現れたままの現象を意味する。そして，それこそが最初の絶対的な所与性とされる時，現象学的還元の手がかりが得られることになる。

ここで現象学的還元を説明する際に，フッサールは，「内在と超越（Immanenz und Transzendenz)」という対概念を提出し，それを基準にして論を運ぶ。すなわち，「コギタチオの直観的認識は内在的」とされ，客観的科学の，自然科学や精神科学，そして，数学も，超越的だとされる。さらに，客観的科学は超越の危惧，すなわち，いかに認識は自己を越え得るのか，意識内部に見つけられない存在にどのように的中することができるのか，という危惧に囚われるが，コギタチオの直観的認識の場合には，そのような危惧は

成り立たないとする（S.5)。

この点に関しては，次のように考察されよう。フッサールが述べるように，この内在は自然科学的な意味での心理学における内在とは異なる。そのような心理学は，人間の心と，それ以外の客観的世界とを始めから分けて考えるが，そのように考える限りにおいては，先の超越の危惧に苛まれることは明らかである。これに対して，「コギタチオの直観的認識は内在的」と述べられる内在は，直観的であるから，その限りにおいては未だ超越的とは言えないが（のちに構成理論によって超越性を与えられる。)，コギタチオそのものしか存在を確かめることができないのである。そこには，超越的などというものは，あるかどうかさえ問われないのである。このような内在をフッサールは「実的内在（reele Immanenz)」と呼ぶ（S.5)。フッサールは，こうして，デカルトのコギトを手がかりにして，「実的内在者，もしくはここでは同義語ではあるが，十全的自己所与は疑いようがない」(S.5）と，述べることになる。そして，それをふまえて「現象学的還元を，すなわちあらゆる超越的措定の排除を遂行しなければならない」(S.5)，つまり，例えば科学的な客観性といった客観的存在として考えることを排除しなければならないと述べることになる。

このことをフッサールは定義的に「現象学的還元とは，すべての超越的なもの（私に内在的に与えられていないもの）に無効だという符号をつけることであり，すなわち，その超越者の実在と妥当性をそのまま定立しないで，せいぜい妥当現象 (Geltungsphänomen) として定立することである。」(S.6) と述べる。

このようなフッサールの考察は存在すべてに対する指摘であるが，特に，夢解釈においては強く留意しておくべきことである。筆者は，この現象学的還元から派生してくる方法として構造的解釈を意識し，遂行している。以下それを具体的に考察する。

## 2．夢解釈の方法

さて，このような現象学的還元を前提として夢解釈に取りかかろうとする時，夢に現れた個々の事柄をすぐさま「AはBである。」というように捉えてはならないことは明らかである。かといってすべてが曖昧なままで放置しておくわけにもいかない。なんらかの，意味決定をしなければならないが，現象学的還元の意図を勘案すれば，意識現象の全体を全体とし，同時に，意識現象でさえ未知で無限な全体のひとつの結果でしかないという全体との関係の中で，個々の事柄を考慮していかなければならないのである。端的に，かつ現実的な作業を前提として言えば，その場合，ひとつの事柄がどのような構造的背景に位置づけられているのかが意味決定に参画する。このような，構造に対する配慮を背景として夢を解釈する場合，筆者は次の三つの側面から考察し，それらを統合しつつ解釈を遂行している。

第一の側面は，「夢を見ること」に付随する側面である。

第二の側面は，夢に示される象徴的意味を見いだす側面，すなわち夢の構造的解釈の側面である。

第三の側面は，それらすべてを統合する論理的整合性の側面，もしくは夢解釈の実践的側面である。

以下，考察するように，これらすべてに構造を配慮している。

### 1）「夢を見ること」に付随する側面

#### a．現実や環境の反映

「夢を見ること」に付随する夢とは，夢を見ている以上必ず見ているであろう夢のことである。すなわち，夢と現実という構造的差異に必ず伴う夢である。

その中で最も考えられるものが「現実や環境の反映」であり，直接夢に反映する。

さらにその中で最もありうるのが，「生理的理由」である。トイレに行きたいからトイレの夢を見る。漏らしてはいけないから何らかの障害のあるトイレでなかなか用をたすことができない夢を見る，といった夢は多くの人が経験する夢である。また，寝室の近くの騒音が刺激になって騒音に引き起こされ，連想した夢を見ることもある。

「特定の対象への個人的な思い」も，直接夢に現れ易い。好きなタレントが夢に現れるなどというのは，その典型である。

この様式が少し複雑になるのが，「特定の思想・宗教」が夢に現れる場合である。「特定の対象」の場合は，そのものが直接現れるが，「特定の思想・宗教」の場合は，考える様式が現れたり，それらの思想や宗教に特有の象徴的表現になる場合が多い。

また，「不安・違和感」といった意識と無意識の全体を通しての構造の変化を意味する感情は，さまざまに姿を変えて夢に登場する。この場合，解釈の鍵になるのは感情である。違和感がある内容の場合でも，ほっとする，安心する，などの肯定的な感情を持つ場合には，その内容の象徴的意味がすでに自分に備わりつつある，つまり，次の段階への成長に達しつつあることを意味している。また，怖い，嫌いといった否定的な感情を持つ場合には，その意味は二分する。ひとつには，その内容において生存に不利な方向を指し示している場合である。未熟な女性が，まだ出会ってはならない異性の影に怯えて，見知らぬ男性に追われる夢を見るという例がこれに当たる。もうひとつには，その内容において，生存に有利な方向を意味していても，夢を見る本人の成長にとってまだ遠い存在である場合には，否定的な感情を持つ。現実的にも，教師の正当且つ親切なアドバイスに，生徒が反発する例がこれに当たるし，夢に神を象徴するものが現れて，怖い印象を持ったなどというのがその例である。

このほかにも，民族特有の夢や，受験の不安が反映した夢など，夢を見るものの現実を知ればすぐに納得できる夢もある。

もちろん，夢は象徴的なものだけに，「ａはｂである」と単純に置き換えて

はならない。この現実や環境の反映は，現実を知ればすぐに思い当たるものだけに，下記のさまざまな原因との複合的対応を考慮しなければならない。

b．生理学的に眠ることに付随する夢

また，「生理学的に眠ることに付随する夢」もある。これは，生理学といういわば肉体的側面と，精神的側面などの他の種々の側面を構造的前提として考えた場合の，一側面に着目した場面での解釈である。

最も典型的なものは，「眠りの深まり」や「眠りからの覚醒」に関わる夢である。前者に関わる夢としては，穴に落ちたり，階段を落ちたり，絶壁で足を踏みはずしたりする。後者は，何か明るい所へ出ようとしたり，階段を上がったりする。これらは，実は毎晩夢見るまでもなく体験していることになる。

では，夢見ることに関わる，このような眠りの深まりや覚醒といった現象は，生理学的にはどのように考えられているのだろうか。この点はまだ研究中といった方がふさわしいレベルではあるが，ここでは，歴史的に進みつつあるその理論的概略を確認する。

妙木浩之「『夢分析』の現在」（妙木浩之編『夢の分析』至文堂，1997）でも概説されているように，夢に対する生理学的な画期的成果は，1953年にシカゴ大学の大学院生E．アゼリンスキーと彼の教授N．クライトマンがＲＥＭ（Rapid Eye Movement）を発見したことにあるとされる（14頁）。それ以来，おおまかにはこのＲＥＭ睡眠時に夢を見ているとされるようになった。

この研究の成果について，大原健士郎『夢の不思議がわかる本』（三笠書房，1992）では，眠りの深まりや覚醒に関して，次のように纏められている。

普通の眠りには徐々に深まっていく四つの段階があり，第一期は五分から十分で通過し，より深い第二期へと至る。やがて，第三期，第四期と深まるが，三十分もすればまた第一期の浅い睡眠に戻り，また第四期までを繰り返すとされるのである。そして，この第一期において，目が活発に活動するので，Rapid Eye Movement 睡眠と名づけたのである。そして，同書ではこの

時期の睡眠中の九割が夢を見るとされる（186—188頁）。

大原健士郎「夢」（大原健士郎編集解説『現代のエスプリ　夢』至文堂，昭和48年）では，ＲＥＭ（Rapid Eye Movement）睡眠について，「手指や顔面の筋肉がピクつき，身体全体が大きく動くこともある。しかし，姿勢を保つために働いている筋肉の緊張はなくなる」「いびきは止まり，ねごとは声の調子が情緒的になる。」「一般に血圧は高くなり，かなり変動する。呼吸運動や心拍のリズムは乱れ，発汗の状況も変化する。尿の分泌は減少し，瞳孔も大きくなったり小さくなったりする。」「陰茎が勃起してくる。」「妊婦では胎動が活発になる。」（16頁）などと説明されている。

また，『夢の不思議がわかる本』では，ＲＥＭ睡眠とより深いＮＯＮ—ＲＥＭ睡眠の両者を次のように比較している（187—188頁）。

ＲＥＭ（Rapid Eye Movement）睡眠（別名，逆説睡眠もしくはパラ睡眠）

意識，筋肉がやや働く＝目がまぶたの裏で激しく動き，反射的反応の多くは停止し，筋肉は弛緩する。→夢を見る

（ＮＯＮ—ＲＥＭ睡眠のＲＥＭ睡眠直前直後が一番激しく筋肉が働く）

ＮＲＥＭ睡眠（ｎｏｎ—ＲＥＭ睡眠，別名，徐波睡眠もしくはオーソ睡眠）

意識，筋肉とも働かない。

このように，夢の深まりは生理学的観察によって裏付けられている。

ｃ．夢の象徴的現われにおける退行的表現

上記のように，夢の深まりは生理学的側面からも裏付けられるが，夢解釈においては，その深まりを，心理学的文化的側面から捉えることもできる。一例として，夢の解釈に有効に利用しているものは，そのテーマに着目して「夢の象徴的現われにおける退行的表現」という視点から捉えることである。

退行とは，意識無意識の境界が曖昧になり，一種の混乱状態としてエネルギーの消耗が激しい状態を指す。このまま置けば生存にとって不利であったり危険になったりするが，しかし反面，無意識的な問題のある段階にまで退行するので，混乱の意味を適確に捉えれば問題が明確になるし，エネルギー

を補えば，前の段階より大きな再統合，すなわち発達を導くことができる。

夢の解釈に関して，筆者はそれを大きく二つに分けて理解している。

その第一は「歴史的遡行」である。時代劇仕立ての夢を見たり，過去の自分の夢や，古い風景の夢を見る場合がこれに当たる。この場合，その時代が古いほど，深い退行だと理解し，その段階にこそ，夢を見た本人がその時解決すべき問題がある，と捉える。

第二は「発生的遡行」である。これはおおむね系統的発生を遡ると解しておけば良い。

筆者は，荒木登茂子編著・荒木正見共著『心身症と箱庭療法』（中川書店，1994）で，箱庭療法（Sandplay）の経験例から，映像的な退行レベルの循環モデルを提起した（19—21頁）。意識に近い段階からより深い退行へと列記すると以下のように示される。説明は小論に合わせて新たに作成した。

(1). ロゴス的世界・・・・・・意識的に考察されるような，存在そのものや論理的構造，存在原理などを問題とするような，宗教的，哲学的象徴によって示される世界。

(2). 人間社会・・・・・・・・人間の一般的な生活を表現する世界。退行の中でも標準的段階。

(3). 家畜・牧場・動物園・・・人間と動物たちが触れ合う世界。

(4). 動物界・・・・・・・・・動物たちだけの世界。人間の内面の動物性の状態。

(5). 爬虫類界・・・・・・・・爬虫類たちの世界。動物がさらに抽象化された状態。

(6). 恐竜界・・・・・・・・・恐竜たちの世界。エネルギーの状態を露呈する世界。

(7). 植物界・・・・・・・・・植物によって表現される世界。無意識の深層の配置状態を表わす世界。

(8). 鉱物・砂漠界・・・・・・鉱物や砂そのものによって表現される世界。

無意識の底の構成を表わす世界。

(9). ロゴス的世界・・・・・・(1)と同様，存在そのものや論理的構造，存在原理などを問題とするような，宗教的，哲学的象徴によって示される世界ではあるが，無意識の最根底だけに，直観的，感覚的な現れ方をする。

もちろん，この図式を前提に考えるということであって，このまま進行するというわけではない。この発生的遡行の場合にも，その段階にこそ，夢を見た本人がその時解決すべき問題がある，と捉えるのである。さらにこの場合特に顕著なのは，ある段階での問題が解決すると，徐々に(2)の人間社会の表現へと上昇するが，解決が不完全であれば，どこか途中の段階で表現し，時にはまた下降したりしつつ，徐々に(2)へと接近していく。

2）夢の構造的解釈の側面

すでに述べてきたように，夢もまた現実と同様，構造的な現れ方をしている。実際の解釈では，個々の象徴的な事柄の象徴的意味を解釈しなければならないが，それらの意味については，シンボル事典などを参考にすることになる。しかし，象徴的事柄は「AはBという意味を持つ。」とは単純に置き換えられないものである。さまざまな意味のうちどの意味なのかを判断する時に，全体の構造を考慮しなければならない。すなわち，全体の構造との関係においてはじめて，象徴的意味が決定されるのである。

以下，筆者の経験から，それら構造的解釈の幾つかを考察する。

a．テーマの反復

解釈は独断的であってはならない。従って，ある事柄が一見明らかな意味を伴って現れても，それを鵜呑にしてはならない。このような意味で解釈の手がかりになるのが「テーマは反復する」という事実である。

まず，方法を具体的に述べれば，夢全体のストーリーをテーマの固まりの

連続として構造的に分解してみるつもりになる。そうすると，一見異なる事柄でも，なにか共通のテーマで結ばれていることが見えてくる。もしくは，あるテーマがさまざまに姿を変えていることに気付く。

例えば，「はじめ自分が車の運転をしようとしている。その時急に，自分は免許を持っていないことに気付く。しかたがないので歩いていこうとするが，途中から重要な試験を受けにいく途中だと気付き，あわてて駆け出すが全く進まない。」などという夢は，無免許や試験によって繰り返し象徴される自己の能力に対する劣等感の現れだといえる。

なお，この場合，「駆け出すが進まない」というのは，劣等感の現れでもあるし，ＲＥＭ睡眠特有の，夢を見ていながらも筋肉は弛緩していることの現れでもある。

ｂ．述語による理解

構造的解釈においては，事柄個々の直接的意味よりもそれらが相互にどのような関係にあるのかが，重要な鍵になる。従って，事柄の主語的側面よりも述語的側面に着目しなければならない。

例えば一本の針葉樹が現れたとする。フロイト流の置き換えをすれば，それは男性的要因ということになる。もちろんそのことは解釈の鍵ではあるが，この夢の場合にはそれがどのような意味での男性的要因なのかということになれば，述語に，すなわち，その事柄がどのような姿をして，どのような行動をとったのかに着目しなければならない。

このような述語によって，主語の意味が規定されていくが，これはまた，属性の普遍的意味に厳密に着目することをも意味している。象徴解釈的な意味において主語に無限の意味があると同様に，述語にも無限の意味がある。ひとつの形容詞が他の形容詞とどのように連関しているのか，ひとつの動詞が他の動詞とどのように関連しているのか。ひとつの主語をめぐるこのような構造的考察が複雑になればなるほど，ひとつひとつの語の普遍的な意味を広範に知っておくことが必要になる。

c．違和感（異和感）と構造的目安

構造的解釈をする場合には全体を常に見通すことが必須条件であることはいうまでもない。しかし，全体を見れば見るほど，なにがテーマかが分かりにくくなる。その場合の手がかりは自分の感性しかない。しかし反面，現象学的還元の立場からいえば，その感性に，対象を超越的，客観的だと思い込む主観的判断の誤謬の可能性が忍び込んでいるのである。これらをふまえても感性をてかがりにしなければならないのだから，なんらかの方法的手順が必要になる。構造的解釈そのものがその方法的手順であるが，構造的解釈にとりかかる瞬間に求められるのが，違和感である。

違和感とは，対象の全体と，自己の認識の全体との不一致である。ありえないことではあるが，仮に自己の認識が完全であるとするならば，その違和感はそのまま対象のテーマになる。

では，自己の認識が不完全であるというごく一般的な場合にはどのように考えればよいのか。この場合，とりあえずは，その違和感をあらわにすることからはじまる。次に，その違和感の原因を，対象と自己認識との双方に展開させて追求する。

構造的に考える際，意識無意識の全体のどこかに，不安定な要素があれば，違和感を感じるであろうことはすぐに思い当たる。その典型的なものが，コンプレックスや心の傷，すなわちトラウマである。コンプレックスやトラウマについては，それぞれ語を使用する研究者によって少しずつニュアンスが異なるが，共通して言えることは，意識無意識の全体のどこかにシステムとして定着している，過去の体験および誕生と同時に組み込まれたなんらかの異常（おそらくはそのままであれば生存に不利な条件）を指す。この場合には，夢に現れた違和感をてがかりにしつつ，体験をさかのぼったり，連想法や催眠を併用して違和感の原因を探ることが行われている。

また，いかなる場合にも必要になるのは，それぞれの目標に応じた構造的な意味合いを持つ普遍的な目安である。

その中でも，最も重要でかつ有効な目安は，どんな人も，どんな年齢でも，

必ず無限の人格発達を遂行しつつある，という前提である。重い精神障害の人も，脳死状態の人でさえも，この前提で捉えるつもりになると，行動や状態の説明が容易になる。夢の解釈でも，この無限の人格発達のダイナミズムを前提にすると，うまく説明できることが多い。

そして，それゆえに，その人格発達をより詳細に知るために作られた幾つかの目安を背景にして，当初の違和感を説明すると，違和感の意味が明確になる。

例えば筆者は，人格発達であれば，エリクソンのライフ・タスクの諸段階の図式を用いたり，交流分析（ＴＡ）のエゴグラムの基準を用いたりする。これもなるべく複数の図式を用いる。

また，筆者は，よりシンプルな人格発達の図式を求めて，物語分析の一環としてレトリックの構造や，心理学的な退行・再統合の構造と重ねつつ，日本の昔話とくに英雄譚において潜在的に前提されているであろう人格発達の図式を次のように求めた。その図式については『桃太郎』を例にあげつつ概説する。

①［誕生］―モチーフ（潜在的テーマ）―退行（統合崩壊）の兆し

昔話において英雄の誕生は，全体の恒常性（ホメオスタシス）に変化を与える兆しである。そしてその英雄の誕生の状態（述語的側面）に着目すると，なにか違和感を与える状況が設定されており，そこにはすでにテーマが内包されていることに気付く。

例えば，『桃太郎』が正義を貫くテーマを持つことは明らかだが，桃から生まれるという違和感を与える状況にモチーフが含まれるはずである。流れてくる桃は，関敬吾編『日本昔話大成３』（角川書店，昭和53年，69―85頁）によると，多くの地方では二個流れてくる。そこから桃太郎が生まれるパターンは二種類ある。ひとつは，はじめに流れてきた桃をおばあさんが食べてしまい，おじいさんにわるいことをしたと反省して，もう一個流れてきた桃をおじいさんのために持って帰ったところ桃太郎が生まれた，というものである。もうひとつは，はじめから桃が二つ流れてきて，おばあさんが「よい桃

こっちこい，わるい桃あっちいけ。」というと，良い桃が寄ってきて桃太郎が生まれたというものである。この両者に共通しているのは，すでに善悪の区別である。

②［成長］―モチーフの展開―退行への予感

昔話の英雄が，テーマを象徴し，担っていることはいうまでもないが，物語の構造において，英雄の成長はテーマの展開と一致する。

例えば桃太郎は，強く賢く正しく成長するが，こんなに問題を起こさない優等生だということが，すでにモチーフに示され，のちにテーマに連なるということは明らかである。

この場合，順調で健全な成長というのは，常識的な意味での違和感はないかもしれないが，この種の物語というものは，違和感をもってテーマとするものだという，レトリックの構造と心理的な感触との一般的な現れを背景にして考えれば，そこに違和感が現れてくる。そこで，この違和感を背景にして，例えばテーマの反復を捜せば，テーマがくっきりと現れてくることになる。

③［冒険］―テーマの発現―退行から再統合への過程

英雄譚には冒険がつきものである。冒険には混乱とそれにまつわるエネルギーの消耗と，そして，勝利するにふさわしいエネルギーの充塡が与えられて，英雄の勝利に至るのである。

この場合，エネルギーすなわち英雄自身の，もしくは物語そのものの活力は，量的なエネルギーに限らず，質的なエネルギーも考えられる。量的なエネルギーは，英雄を主語とする述語に着目すれば，眠る，食べる，休むなど，分かり易い形で表現される。これに対して質的エネルギーは，統合的な構成，すなわち少ないエネルギーで大きな効果をもたらす仕組みだと理解する。従って，知恵を得たり，無駄なものを切り捨てたりなどという形で表現される。

このようにエネルギーの充塡される状態は，多くの場合，対立的要素の統合過程か，貧困，独身などの欠如状態が満たされていく過程として表現される。

『桃太郎』の場合は，鬼という分かり易い敵と戦うのだから，その敵の述語や属性に着目すればよい。一般的に鬼が必ず悪を意味するわけでもないが，この場合は，一方的に悪だと表現されている。したがって桃太郎の戦いは悪との戦いだということになる。このことを，テーマの反復を想定して，誕生以来のこれまでの内容と比較してみると，悪との戦いとその克服というテーマが全体を貫いていることが明らかになる。

④［結婚・人格の完成］―テーマの終結―再統合

多くの場合，英雄譚は英雄の結婚で幕を閉じる。結婚は男性的要因と女性的要因との統合を意味するが，それぞれが男性もしくは女性だということは，人間にとって最も原初的な欠如だからであり，統合はその欠如の充塡を意味する。従って，結婚は同時に人格の完成を意味する。

もちろん，人格の完成という意味がより根本的なだけに，必ずしも結婚が英雄譚の終結ではない場合もある。しかし，反面，『桃太郎』が結婚しないパターンがほとんどなのは，次のようにそれなりの未完成な理由があることも多い。

『桃太郎』が結婚しないことを違和感と感じるのは，英雄譚は結婚で終わるという物語構造上の常識が背景にあってのことである。では，結婚するためには何が必要かといえば，やはり統合に至るエネルギーである。『桃太郎』において，テーマの反復を意識すれば，「食欲」が頻繁に現れていることに気付く。モチーフにおけるお婆さんの食欲，戦いに敗北する原因となった鬼の宴会，これらは，正常の域を越えた食欲の例である。量的には多いのだが，それは生存のバランスを失わせる質的には良くないものとして現れる。反面，食欲は当然，生存の役に立つ。『桃太郎』では，食欲の良い面は黍団子によって示される。述語に着目すれば，黍団子によって味方を得，それによって鬼との戦いに勝利するといえる。しかし，それにもかかわらず桃太郎は結婚しない。ということは，なにか別の構造上の理由があるはずである。それは，エネルギーの獲得のしかたと，その使い方だといえる。黍団子はお婆さんから与えられたものであり，それを三人の家来に分け与えて，彼らの力で勝利

する。エネルギーとは本来，自分で獲得し，自分で使うという原則からすれば，まだ未熟である。それゆえ，桃太郎は結婚には至らないといえる。

物語の構造からいえば，この統合はテーマの終結を意味するため，最後の安定的な構図を形作る。ここでは，すでに違和感はないのだからテーマは消滅している。また，物語に期待を持たせるために，「旅立ちのテーマ」すなわち，新しい可能性，新しいテーマに向けて旅立つという終わり方をする場合もある。

このように，違和感にはその背景となる構造的目安，普遍的図式というものが前提になっている。夢解釈においても，その前提を確認しつつ，違和感の意味，すなわちテーマを求めていくことになる。

d．組み込み

夢の構造的解釈で，しばしば有効なのが，組み込みという構造である。組み込みとは，あるストーリーの流れや，連続する状況に，他のストーリーや状況が組み込まれる場合である。

例えば，先に述べた「退行的表現」の「歴史的遡行」と関連するものとして，現代の光景だったのが，突然時代劇になる，という組み込みが起こる。この場合は，まず，その時代劇部分のテーマが，深層における当面のテーマであり，従って，今，そこになんらかの問題を感じているということになる。次に，そのテーマと，テーマの反復を意識しつつ，現代の光景の部分を考慮すれば，そこにテーマの反復が示されるはずである。こうして，組み込みの場合はテーマを見つけ易いことになる。

この組み込みは，映像的にも起こる。黒澤明監督・脚本，映画『夢』(Warner Bros. Inc.1990) では，夢を見ている本人でもある主人公が，ゴッホの絵の中に入り込み，さまざまなゴッホの絵の中を，ゴッホその人を捜し歩く，というシーンがあったが，最後の「麦畑」の絵の中で，ゴッホの絵の極意を聞くのである。この極意がテーマだし，この夢で主人公が求めていた違和感の真の意味がこれだということはいうまでもない。このように普通の風景から，

そこにある絵画の中に入っていく，という組み込みも，重要である。

いずれの場合においても重要なのは，この組み込まれている部分に，その時隠されているテーマの鍵があるということである。

e．右と左

夢の映像的構造の中で，右と左は重要な意味がある。一般的には，右は意識的な側面を意味し，左は無意識的側面を意味する。よく注意してみると，映画にせよ，夢にせよ，ストーリーの多くの場面では，画面の右半分で物語が遂行されている。その方が意識に訴えるからであるし，自ら右に意識的行為が反映されるのである。

同じ対象が現れても，意識と無意識とでは意味が異なる。例えば，海が左に現れれば，無意識の海を自然に捉えているということになり，右に現れれば無意識へと積極的に退行したいということを意味している。登場人物の右や左へと動く方向も同様である。左に動けば，無意識へとさらに退行することを意味し，右に動けば，意識的に変化したいことを意味している。

f．明るさと暗さ，具象と抽象

いずれも，前者，すなわち明るさや具象が意識的な側面を意味し，後者，すなわち暗さや抽象が無意識的な側面を意味する。また，後者が退行的側面を意味するのに対して，前者は統合的な側面を意味する。

g．典型的テーマ

以上のさまざまな構造的背景と，シンボル事典などで示される個々の事柄の象徴的意味がからんでテーマが形成されるが，そのテーマにおいてさえ，すでに普遍的構造の一角を構成するといってよい典型的なテーマが指摘される。以下，そのうちのほんの幾つかを取り上げて考察する。もちろん，現象学的還元，もしくは現象学的判断中止を考慮しなければならないのだから，このような典型が現れたからすぐにその意味なのだと決めつけるのは危険で

ある。あくまで，ひとつの構造的データとして，全体の構成の中に位置づけつつ，全体の解釈を遂行しなければならない。

＊死と再生の夢

枯れ木，骸骨，切り株，廃墟などのように死を連想させるような象徴的事柄の夢や，自分が殺される夢など，文字通り誰かが死ぬ，もしくは死ぬことが暗示させられるような夢は，「死の夢」と呼ぶことができ，多くの場合，「再生の夢」と同時もしくは時間をおいて連動して現れる。再生の夢は，赤ん坊や妊娠，木の芽，双葉，さらには一度死んだものが甦るなどといった姿で現れる。これらをセットにして「死と再生の夢」と呼ぶ。

「死と再生」をひとことで言えば，人格発達ということである。

現象学的還元を意識して考察すれば，「死」とは，たとえどれだけ現実的な様子であったとしても，まず，最も直接的な意味としては，「無意識における何かが終わった。」と取る。もちろん，先の考察における「現実の反映」という意味で，現実の誰かの死と対応する場合もある。そのレベルにおいてはそのように位置づけて解釈しなければならないが，その場合も根底には，「無意識における何かが終わった。」（その何かを身につけたでもあり得る）があると取っておく方がうまくいくようである。

同様に「再生」は，「無意識において新しいなにかが始まった。」ということを意味している。そして，多くの場合，「死」とセットになって現れる。時期を置いた場合には，相互の連関は掴みにくいが，後述するように，夢解釈と現実とが対応しているかどうかを目安にして考えればよい。「死と再生」の夢を見れば，現実にもなにか成長やそれにともなう変化が起こるものである。

＊戦いの夢・曼荼羅（マンダラ）の夢

夢になんらかの「戦い」が現れれば，それは欠如や対立的要因のために内面的な葛藤をしていることと理解する。意識・無意識を通じた全体は，欠如を満たし，対立的要因を統合すべき，本来の運動を行っている。この運動を成長と呼んでもよい。成長の過程には，数多くの欠如や対立を経験し，乗り越えていかなければならない。このような欠如や対立の統合過程が，「戦い」

の夢として現れる。

先に『桃太郎』では，鬼との戦いについてこの点に言及したが，同時に，エネルギーについても言及した。すなわち，戦いの夢が現れるような葛藤的な事態においては，エネルギーが充塡されれば，より高いレベルでの統合へと結びつくはずである。

そして，ある段階の統合は，「曼荼羅」の夢として現れる。東洋の文化において曼荼羅は，金剛界，胎蔵界の両界曼荼羅が代表的なものであるが，諸仏を幾何図像的に並べた両界曼荼羅に限らず，例えば桃太郎が最後に宝を得て凱旋してきたように，当面の欠如や対立的要因の統合によって安定的な状態を示す内容であれば，それを広義の「曼荼羅」として理解する。

このような曼荼羅の夢は，ひとつの安定的な状況を意味するが，他方，次のより高い成長をめざして崩壊する可能性をも含んでいる。

＊飛翔の夢・墜落の夢

「飛翔」の夢については，徳田良仁「典型的な夢の解説」（『自然読本　夢・眠り』河出書房新社，1984，42-48頁）では，「現実生活の厳しさから逃避しようとする欲望の現われ」「自然に課せられた限界を超越しようとする欲望」「冒険とか躍進に対する期待」などという未来型の説明と，性的な欲望などという意味が紹介されている。何にしろ，ある状況から，異次元的な状況へと変身することを意味している。

しかし，この場合も，他の諸条件と複合させて考えなければならない。左から右へと飛翔すれば，無意識的な状態から意識的な状態を目指すのであり，右から左へと飛翔すれば，その逆である。

また，エネルギーも解釈の鍵になる。激しい動きは，激しい変化を，緩やかな動きは，緩やかな変化を意味する。

現実に航空機に乗った体験の直接的な影響で飛翔の夢を見ることもあるし，眠りが浅くなる際に，上昇する夢を見ることもある。

これに対して，「墜落」の夢は，徳田良仁「典型的な夢の解説」では，現実的な体験の反映をのみ述べているが，おおむね上に述べた「飛翔」の夢の逆

だと考えればよい。

＊追いかけられる夢

成長期に誰かに追いかけられる夢を見るものは，意外に多い。青年期に見る夢の種類の中でも最多に位置するとされる位である。そして，この夢はほとんどの場合，恐怖を伴うものである。

徳田良仁「典型的な夢の解説」では，隠れん坊などの幼児期の体験，性的興奮に伴う硬直体験，時間体験における不調和などの意味が述べられているが，構造的に捉えれば他にもいくつかの意味を考えることができる。

自覚的な意識と，無自覚的な無意識との構造を想定してみると，われわれにとって無意識的な事柄は常に，意識にとっては未知である。一方，成長とは，常に意識に対して無意識的な何かが現れて，意識無意識の全体を通した大きな構造変化をもたらすことである。一般的に，変化はそれまでの恒常性の崩壊を意味するだけに，ある種の恐怖を伴う。そして，成長に伴う変化は，これまで考察してきたように，その時必要な成長の条件として現れる。その条件が例えば「戦い」のテーマとなる場合もある。しかし，成長，すなわち統合に必要な条件が，本人にとって未だ遠いものである場合には，それは単純に恐怖となって現れる。

例えば，女性の成長期に見る追いかけられる夢で，姿のよく分からない男に追いかけられた夢を見た，というものがある。まず，注意すべきは，恐怖の程度である。恐怖心が強ければ，その追いかけるものによって象徴されている成長の条件は遠い。逆に，恐怖心があまりなければ，すでに統合に近づいている，と理解する。次に，その男の年齢を確かめる。それが若い男性であれば，性的な欲望（これも成長の重要な条件であるが）の抑圧だということが考えられる。また，中年の男性であれば，父親の厳しいしつけである可能性を考える。厳しいしつけは成熟した社会人にとって必要な規則を教えるものではあるが，無限の成長という自由な運動に対しては枠をはめることでもある。これに対しては，未だ未熟で不可解なだけに，追いかけられるような印象を持つ。

このように，追いかけられる夢には多様な側面と意味が想定されるが，いずれにしても成長と重要な関係があると思われる。

3）夢解釈の実践的側面

最後に，夢解釈の実践を考察しなければならないが，これまで述べてきたことのすべてが，実践の一端であることはいうまでもない。ここではそれらを意識しつつ，おおまかなまとめを行う。

はじめに小論では，現象学的還元を前提にしているので，まずはその大前提として，

第一点　いかなる判断をもせず，事柄そのままにとらえることから出発する。

第二点　断定的な判断を避け，事柄を全体との区別において捉えるのではなく，いわば全体との連続を維持する焦点として捉え，論理的理解，および構造的理解をする。

という二点を起点にする。

例えば，鑪幹八郎『夢分析入門』では，夢分析の手続きと称して，次の順序で夢分析を行うように述べられている。

[夢分析の手続き]

a．まず記録した夢を，そのままで何度も読んでみること。

b．次に，夢を少し焦点づけて扱う。

c．主題の発見と関係させて一晩にいくつもの夢をみたり，一週間にいくつもの夢をみたりしたら，それを一連のシリーズとして扱ってみる。

d．夢の中にみられる動作や行動，行為をとらえる。

e．夢の中にみられる情緒，情動の状態をとらえる。

f．夢の状況，事物および人物像を分析する。

g．そこで，最後にもう一度夢の分析と総合を行う。

h．夢の分析や解釈が面白くなったからといって，一つの夢にあまり時間をかけるのは生産的でない。

（鑪幹八郎『夢分析入門』317-329頁）

ここでのａ．は，第一点と対応する。そして，現象学的還元を前提としたすぐ次の段階がｂ．である。第二点でも述べているように，現れたものに対して超越的な判断を下すのではなく，全体との関係を保ちつつ，全体の焦点として緩やかに捉えるのである。

第三点は，夢を時間空間的な系列として，全体の流れに現れるテーマを捉え，そこからいま，ここでのテーマと結びつけるということである。このテーマの発見に，違和感が重要な手がかりになることはいうまでもない。

ｃ．は，テーマの発見について述べられているが，それはすなわち，今何が問題なのか，を考察することである。そしてここでもうひとつ述べられているのは，ひとつの夢として捉えるのではなく，複数の夢の系列として捉え，論理的理解をするということである。意識と無意識は本来連続している。人は一生を通じて大きなたったひとつの夢を見ているといっても過言ではない。その大きな流れの中にその都度のテーマが次々に現れるのである。

第四点は，主語に囚われるのではなく，述語による理解を軸にするということである。

ｄ．ｅ．ｆ．が，述語による理解とそれを基にした総合的な理解を意味することはいうまでもない。とはいえ，具体的な解釈においては，主語の意味をシンボル事典で確認することからはじまるであろう。しかし，シンボル事典とは，なにかひとつでも例があればすべて掲載するという性質のものだけに，どれがふさわしい意味なのかを発見するのは困難である。その時その主語の述語に着目すれば，事典における主語のどの意味が妥当するかが限定されてくる。

第五点は，全体を見通しつつ，総合的理解を行うということである。

ｇ．は，全体を見通す総合的理解を述べていることはいうまでもない。

第六点は，全体を見通す場合，小論では特に，構造的解釈，すなわち，テーマと構図に関する比較論的考察を重視するということを強調する。

これは例えば

・構図の普遍的意味と言葉で表現されるテーマとが共鳴しているか。

・この夢のテーマは典型的なテーマのうちどれに相当するのか。
・個人的なテーマと普遍的テーマとの絡み合い。
・退行における思想の現れ，つまり，退行時こそ真の考えや傾向性，性格が現われる。夢は退行時の典型だし，退行時のストーリーにも真の考え，傾向性，性格が示される。
などを意識しつつ考察を進めることとして述べてきた。
第七点は，夢を解釈するとは，クライアントの治癒や癒しを第一の目的とするということである。

h．は実践上の心得であるが，夢を解釈しなければならない時とは，多くの場合，クライアントの切実な治癒や癒しを前提としている。治癒や癒しからは，できるだけ早く立ち直らなければならない。また，解釈上も特定の夢の内部に固執するよりは，系列として捉えたり，現実との対応によって論証したりする方が早く正確にテーマを捉えることができるものである。まして，夢の解釈をなにもかもクライアントに伝えてはならない。クライアントの治癒や癒しに役立つと決断できない内容については決して伝えてはならない。筆者の経験では，例えばスポーツの相談や訓練に訪れた健康なクライアントで充分エネルギーがある場合でも，解釈できた内容の三割以下しか伝えることができない。

## 結び．

さて，このように，現象学的還元の立場を前提にして展開される夢解釈の方法であるが，序．でも述べたように，このような方法論についての論証は，具体例の検証によって論理性を高めなければならないが，小論の紙幅ではかなわない。小論では，その点を割愛しつつ，夢解釈の一端を考察するにとどめたが，今後の問題としては，より詳細に夢解釈の方法を考察することと同時に，小論の方法を用いて，現実的な夢の解釈を遂行してみることである。後者の場合，この方法で行った解釈と，現実的な行為とが一致すれば，その

解釈は妥当性を得たということになるし，同時に，現実的な行為との対応が得にくい箇所についても，論理的に連なっている以上，妥当しているといえることになる。このような現実的な夢の解釈の遂行こそが今後の課題である。

**直接使用した参考資料（掲載順）**


・鑪幹八郎『夢分析入門』創元社，1976/1996.
・EDUMUND HUSSERL "DIE IDEE DER PHÄNOMENOLOGIE-FÜNF VORLESUNGEN-"Herausgegeben und Eingeleitet von Walter Biemel, Martinus Nijhoff, 1973.
・E.フッサール・立松弘孝訳『現象学の理念』みすず書房，昭和40年／昭和44年.
・妙木浩之「『夢分析』の現在」（妙木浩之編『夢の分析』至文堂，1997，所収）.
・大原健士郎『夢の不思議がわかる本』三笠書房，1992.
・大原健士郎「夢」（大原健士郎編集解説『現代のエスプリ　夢』至文堂，昭和48年，所収）.
・荒木登茂子編著・荒木正見共著『心身症と箱庭療法』中川書店，1994.
・関敬吾編『日本昔話大成３』角川書店，昭和53年.
・黒澤明監督・脚本，映画『夢』Warner Bros. Inc.1990.
・徳田良仁「典型的な夢の解説」（『自然読本　夢・眠り』河出書房新社，1984，所収）.